資料渉猟余話

その117

70年前の指摘

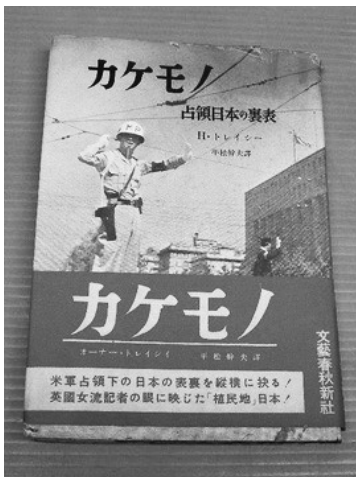
『カケモノ―占領日本の裏表―』

嶋　不濁

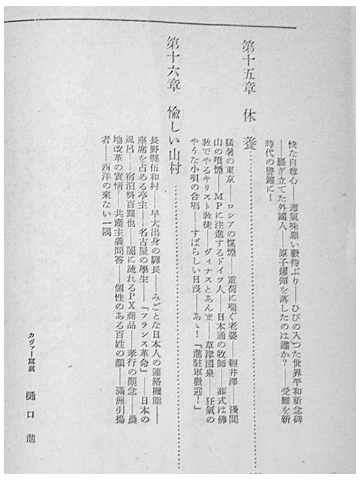
「不恰好な洋服を着て、自動車を乗り廻し、工場や機械を自慢にし、物質的、機械的人生観をぎこちなく、生半可に受け入れているような西洋かぶれした人々は、いっこうに魅力がないばかりでなく、決して日本の真実の姿を示すものではなく、本當の日本人ではなかった」…今から70年も前、1948年2月から、戦後間もない日本に8カ月間滞在したオーナー・トレイシーという女性の滞日記録『カケモノ―占領日本の裏表―』(平松幹夫訳、1952、文藝春秋社)の一節である。彼女が8カ月の日本滞在で探し求めていたのは「本当の日本人」の姿であった。

本書は、1948年2月から、戦後間もない日本に8カ月間滞在したオーナー・トレイシーという女性の滞日記録だ。彼女は英国タイムズ紙の特派記者として、GHQが民主主義を根付かせようとしている日本を見に来た。そのレポートは英国で1946年6月の出版以来、戦後の日本を書いた良書としてたちまち版を重ねるベストセラーになった。日本では占領下の出版統制もあって英国に3年遅れて邦訳が出版された。邦題は『カケモノ―占領日本の裏表―』(平松幹夫訳、1952、文藝春秋社)といい、一風変わった『カケモノ』というタイトルは「掛け物」のことで、日本生活の思い出の「カケモノ」を広げながら8カ月に渡った滞日を振り返る趣きの本である。この特派記者は、当時の英国の東洋学者の第一人者アーサー・ウェイレー卿に私淑する親日家で、アイルランドで小説と評論を書き、後にBBCの解説者を務めたりした女性で、ジャーナリストが本職ではなく、本来、小説家であり批評家であった。彼女が特派記者として日本の地を踏んだのは、おそらく彼女の中で学び、愛した日本と日本の文化が、戦後どのような変質を見せるのか、見せたのか彼女自身の眼で確かめに来たに相違ない。親日家であるからと言って形だけを真似る日本の近代化や、女性の視線から封建的な男性社会の日本に対する辛辣な指摘も厭わない。すぐれた批評眼が随所に感じられる。

『カケモノ』の目次をみれば、第1章の「東京」に始まり、「民主主義」「デ・モ・ク・ラ・シ・ー」「お花見」「旅行」「京都」「軍政部との接触」「魚はどこに行くか?」「法主の秘密主義」「日本の作家」「再び政治について」「日本の悲劇」「アメリカの悲劇」「休養」「愉しい山村」と、女性記者の目に写るGHQ占領下の戦後日本のアンバランスが巧みに切り取られている。そうした猿真似の民主化に揺れる醜悪な近代化を「今や悪化し頽廃した部分こそ、現実の日本」「不恰好な洋服を着て、自動車を乗り廻し、工場や機械を自慢にし、物質的、機械的人生観をぎこちなく、生半可に受け入れているような西洋かぶれした人々は、いっこうに魅力がないばかりでなく、決して日本の真実の姿を示すものではなく、本當の日本人ではなかった」と指摘した後で、彼女が「真実の日本人」と賞賛し愛したのが、滞在の終わりを書いた最終第16章「愉しい山村」であり、それが「外来の影響を受けない」長野県の南端伍和村だったことに小生は驚きを禁じえなかった。



敗戦と同時に「鬼畜米英」「八紘一宇」「天皇の赤子」が一転「民主主義」国家建設を標榜する国に豹変する70年前の日本国の裏表／混乱を読み進めるうちに、いつしか、リニア新幹線、キャッシュレス・システム、自動運転、I・o・Tなど、物質や経済優先、目先の新しさばかり追っている地域社会や現代の日本の姿と二重写しになる。最終章におかれた意味も深い。


第十五章　休養……
孤独の東京―ロンドンの煙煙―何処に残る老婆―朝井蓉―後間山の煙煙―MPに注進するドイツ人―御式師―孤独の地でやるキリスト教徒―グィナスとんぐ―花気のやうな小明の合唱―すばらしい日曜―ふゝ―「濃厚濃厚濃厚！」
第十六章　愉しい山村……
長野県伍和村―早大出身の御長―みごとな日本人の連絡機関―席席を占める承宝―名古屋の學生―「フランス革命」―日本の風呂―宿泊料百圓也―簡に流れるPX商品―茶行の脱念―蟲地改革の實情―共産主義問答―個性のある百姓の顔―満洲引揚者―西洋の来たい一隅
快活百傳々―霧氣陰惨い戦時広り―ひびの入つた世界平和祈念碑―眠ぎ立てた外國人―原子爆弾々落したのは誰か?―受難を新時代の警鐘に!
カケモノ　目次　隨口　徳

『カケモノ―占領日本の裏表―』の最終章は伍和村を去る彼女の次の言葉で結ばれている。「私は長い間念願していたところの、西洋が一度も来てかき亂したことのない、日本の小さな一隅を見たのだ。／バスが走り出して、再びあの混亂と苦悩に満ちた都会に帰る長途の旅行が始まった時、私は心から西洋が二度と来ないことを希った。」

…世界の覇権がターニングポイントに差し掛かっているようで、政治も、経済も、果ては文化も、思想も疲弊し、混迷し、世界は不安に満ちている。識者といわれる人種も、他人と違うことを言うことだけがそのアイディンティティを誇示する唯一の証明かのように様々なことを口にしているが、その実、「不安」という一事しか語っていないように聞こえてしまう。そんな折、この70年前の指摘に耳を傾けることが、見失った日本を取り戻すことにならないか、…そんな微かな希望を抱いたから紹介する次第である。